「汝の罪ゆるされたり」（ルカ五・一七～二六）

1　ガリラヤでのイエスの宣教

今日から、聖霊降臨祭（五月二三日）まで、六回の日曜日、受難節に入る前までの聖書箇所に戻し、ルカによる福音書によって、ガリラヤにおけるイエスの宣教の日々を再び取り上げることになります。

今日の箇所の見出しとして「中風の人をいやす」とあります。二〇一八年に刊行された聖書協会共同訳では「体の麻痺した人を癒やす」となっています。中風という言葉は分かりにくい、あまり使われなくなっている、ということでしょうか。見出しは聖書本文ではありません。便宜的につけられたものです。もとの言葉が当時どういう意味をもっていたのか、今日それをどう表現するのがいいのか、必要なら当然修正されていくべきです。

それはともかく、今日の箇所は、多くの方にとってなじみのある、とくに教会学校などに関わったことのある人には、聞く側としても、語る側としても印象深い聖書箇所の一つです。

とくに心に残る言葉は、やはり一九節、「屋根に昇って瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした」というくだりではないでしょうか。相当インパクト（衝撃）があります。

ただ今回改めてもとの言葉を調べてみたら、瓦と瓦のあいだから、というような訳も可能な文章であることを知りました。そうなるとインパクトも少し小さくなってしまいますが、ほとんどの邦訳聖書は、瓦をはがして、と訳しています。私どもの驚きは、じつは、この現場に居合わせた聖書の人々の驚きであって、それがいま私どもにも伝わっているのです。

そのほかにもいくつか印象深い言葉がある中、今回準備しながら心に残ったのはさし当たり二一節の言葉です。

> ところが、律法学者たちやファリサイ派の人々はあれこれと考え始めた。「神を冒瀆するこの男は何者だ。ただ神のほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか」（二一節）。

後でもう一回触れることがあると思いますが、イエスがガリラヤで宣教活動をはじめて間もないときから、「律法学者たちやファリサイ派の人々」が、イエスの周りをうろうろし始めていました。

ただここでは、まだイエスを直接批判したり、対決するというまでは、行っていません。いまお読みした二一節も、イエスが彼らの心を見抜いて、間接的に対話しているにとどまります。

しかしその中にある言葉（イエスが彼らの思いを代弁して語ったもの）「神を冒瀆するこの男は何者だ」という言葉、中でも、「この人はだれか」、これは重要な問い

です。それが、イエスの敵対者に芽生え、彼らの口から発せられます。イエスとはだれか、イエスとはわたしにとってだれか、実際これこそ今日の聖書に隠れている根本的な問いなのです。

2　中風の人のいやし

こうした問いを念頭に置きながら、今日の箇所、もう一度はじめに戻って見てみたいと思います。

ある日のこと、イエスが教えておられると、ファリサイ派の人びとと律法の教師たちがそこに座っていた。この人々は、ガリラヤとユダヤのすべての村、そしてエルサレムから来たのである。主の力が働いて、イエスは病気をいやしておられた（一七節）。

今日の箇所は、他の福音書、マタイにもマルコにも出ています。それも参考にして申し上げれば、場所はカファルナウム。イエスが宣教の拠点としていた町です。ペトロの家だった可能性も少なくありません（四・三八）。

先ほども触れましたが、すでにこの段階で「ファリサイ派の人びとと律法の教師たち」が、しかも「ガリラヤとユダヤのすべての村」だけでなく、都エルサレムからも来ていたとあります。彼らは民衆が律法を守っているかどうか監視することを使命としてるような人たちです。イエスの働きは、危険なものとして、すでに都のファリサイ人と律法の教師学者たちにも聞こえていたのです。

この最初の節でもう一つ確認しておくべきことは、イエスの働きが、教えることといやすこととしてまとめられていることです。これはすでに何回か申し上げていますけれど、イエスの言葉によっても、わざによっても、神の国が証しされます。それが聖書に描かれたガリラヤにおけるイエスでした。

さていやしを求めて、一人の病人と、この人をベッドにのせて、「男たち」、友人たちがイエスのところにやってきます。

すると、男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。しかし、群衆に阻まれて、運び込む方法が見つからなかったので、屋根に上って瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした。イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた（一八～二〇節）。

中風を患っている人を運んできた男たち、マルコでは「四人の男」（二・四）となっています。この人たちは病気の友人を元気にしてあげたいという一心で、床に乗せたまま連れてきたのです。

着いたときには、もう人で一杯でした。だれもさあどうぞとは言ってくれない。またの機会にすべきでしょうか。少し待ってみるのがよいのでしょうか。しかし彼らは

そのどちらも選択しませんでした。彼らにとって、まさに「いま」というこの時を何もしないで去らせるわけにはいかなかったのです。この時が、最初で最後かもしれない、そうでないとだれが言えるでしょうか。彼らも、そして彼も近づくのをあきらめません。恥ずかしいとか、みっともないとか、そんな思いとは彼らは無縁です。すぐに屋根に上り、瓦をはいで、穴をあけて（マルコ二・四）つり降ろす、驚くべき行動に出たのです。

家を壊されたペトロは一言あってもいいのかも知れませんが、その私心のない彼らの行動にイエスと共に感嘆していたのです。よく注意していただきたいのですが、イエスは「その人たちの信仰」を見て、中風の人に、あなたの罪は赦されたと宣言されたのです。

ところでここまでは、私どもの今日の箇所、ここに記されている出来事に、それほど予想に反したようなことはないように思います。しかしあなたの罪は赦されたという言葉と共に少し違ってきます。この言明は、この状況に合わないように思われるのです。つまり、こう言ってもらった中風の人でしたが、彼はこれをどう受けとめたのでしょうか。彼が求めていたもの、彼が願っていたものを、そのイエスの言葉に見いだしたのでしょうか。いやしていただくこと、不自由な体を健康にしてもらうことがその願いではなかったのではないのかということです。病気が何らかの罪の結果とも考えられていた時代とはいえ、罪の赦しの宣言を聞いて、いやしを確信した、満足した、そう言っていいのかどうかということです。

これとはまた別の意味で、イエスのこの、「あなたの罪は赦された」という言明に疑問を抱いた人びとがおりました。それが聴衆の中に座ってイエスをじっと観察・監視していた律法学者やファリサイ派の人びとでした。彼らは心の中で、あれこれ考え始め、「神を冒瀆するこの男は何者だ。ただ神のほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか」と、言ったというのです。むろん中風の人と違って彼らの敵意は明らかです。

3　罪の赦しのもとで

こうした流れを考えると、罪の赦しの言明のあと、イエスが実際この中風の男をいやしたことは、一方でファリサイ人・律法学者たち、他方で、中風の人、この両方に対するに答えにもなっていたのです。

イエスは、彼らの考えを知って、お答えになった。「何を心の中で考えているのか。『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらがやさしいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」。そして中風の人に、「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」と言われた。その人はすぐさま皆の前で立ち上がり、寝ていた台を取り上げ、神を賛美しながら家に帰って行った（二二～二五節）。

少し分かりにくいかも知れません。分かりやすくするために、大胆に言い切ってし

まえば、罪の赦しのほうが、いやしよりも、易しい難しいではなくて、事柄として大きいということがあるのです。大きな罪の赦しの中に含まれて、いやしはあるということ、罪の赦しが根本ということです。

ですから本当は、罪の赦しの言明で、すべては終わっていいのです。ただ罪の赦しと言っても、まだイエスの言明の中にしかありません。イエスの言葉としてしかありません。まさに目に見えない。それゆえ、人間にとっては、ファリサイ人と律法学者たちにとっても、中風の者にとっても、あるいはそこに集まっていた民衆にとっても、目に見える奇跡、いやしのほうが手近で価値あるもの、欲しいもの、そして難しいものと考えられていたのです。

しかしイエスが中風の人を、目に見える形で立ち上がらせ、歩かせるということこそ、彼が本当に罪の赦しを与えられたことの証しであり、まさにイエスはこの地上で罪を赦す権威をもっている方なのです。

罪の赦しが、いやしより大きいと申しました。同じと言ったほうが無難で、言い過ぎているかもしれませんが、しかしやはり大きいのではないでしょうか。当時病気は罪が原因だと考えられることもありました。そうであれば中風の原因の罪を彼は取り除かれた。しかしそれだけではありません。罪の赦しはもっと根本的なことを語っているのです。

罪とは人間が神から離反している状況のことです。人間が神なしで生きようとすること、生きることが出来ると考えることです。罪の赦しとは、神の側で、そのような神なき状況に終止符を打って下さったということです。神の子イエスは、その十字架の死と復活によって罪をあがない、神と人との和解をもたらし、人が神と共に歩む道を、私どもだれにも開いてくださったのです。

罪の赦しこそ、人間にとって、もっとも根本的なことと、言わなければならないのです。いま中風をいやされた人、今回はいやされたけれども、また彼は病気にかからないともかぎらないのです。いや病気になります。そしてそれはどんなものであっても死を暗示し、死につながらないものはないのです。それは死の力が、生の中に、時々に侵入してくるようなものです。しかし、たとえそうであったとしても、この人は罪ゆるされ、神のものとされた。罪と死とは、罪のゆるしの宣言とともに、すでに克服されています。私どもが地上でも天上でも神のものであることは、地上のどんなことがあっても決してゆらぐことはないのです。

中風の人のいやしは、他方、ファリサイ人・律法学者たちに対する答えでもありました。彼らは、罪の赦しを言明したイエスを、神だけが言っていいことを口にしたと言って非難します。しかしそうでしょうか、「この人はだれか」という問いが今日の箇所には隠れていると申しました。この方は神の子であり自らのご生涯をかけて、神と人の関係を回復させ、私どもを、神なきところから救い出した方です。ただひとり罪の赦しを言明することができる方です。言明されるだけでない、罪の赦しに生きることを現実なものとしてくださる方です。罪の赦しにあずかり「神を賛美しながら家に帰っていった」（二五節）中風の人、彼はいま神の命にあずかり、新たな日々を送ることを許されたのです。

（二〇二一・四・一八）